

令和3年4月
一橋大学

令和3年度一橋大学学校推薦型選抜第二次試験

出題の意図等 【小論文】

商学部

設問1：課題文該当箇所（市場の発展と文化の発展との関係性）に関する論旨が適切に把握できているか、また簡潔に要約できているかを問う問題。

解答例：「まず、市場の取引活動の副産物として貨幣、帳簿のための文字や記号、費用計算や価格設定のための数学などが発明され進歩した。また高価な商品の売り手が特別な建物を持ち、商品製造のために陶工や金属工など技術者も集まる場所であったので互いに切磋琢磨出来る環境だった。そして人が多く集まるために、運動競技、政治的集会、演劇、宗教的行事も行われ盛んになった。これら市場の特徴から、市場での取引活動が盛んになり売り手も買い手も多く集まるに伴って、知識、技術、芸術水準などもさらに向上しただろうと筆者は考えている。」

設問2：課題文該当箇所（市場取引における競争の意義）に関する論旨が適切に把握できているか、また簡潔に要約できているかを問う問題。

解答例：「市場での取引は本来自主的に行われるものである。ただし交渉力の大小などで、交換の同意や拒否といった選択は完全に自由ではない。特に売り手もしくは買い手が一人しかない場合は交渉力が著しく大きくなり、その個人の判断が取引を左右してしまうことになるため、取引相手にとっては選択の自由がなくなってしまう。他方、競争とは別の売り手もしくは買い手も存在する状態なので、取引相手には代替的な選択肢があり選択の自由がある。つまり競争によって、交渉力の大きい個人による市場への影響力を制御出来ると筆者は考えている。」

設問3：課題文該当箇所（市場経済という文脈での非市場的取引の解釈）に関する論旨が適切に把握できているか、また簡潔に要約できているかを問う問題。

解答例：「非市場的な取引には、三つのカテゴリーがある。一つ目は家庭内で行われる取引で、介護や家事、食事の支度など、支払いの行われない家庭内活動に関するものである。二つ目は政府内で行われる取引で、道路建設、学校や警察の運営など、公的な意義をもつ活動に関するものである。そして三つ目は企業内で行われる取引で、製品を構成する部品など、企業活動に関するものである。これら活動については、財の売買が自由に行われるわけではないが、それぞれ限定的な場所の中で、特定の活動の売り手（活動を担う人）と買い手（必

要とする人)が存在していることは市場取引と同様である。また、それら活動の担い手は単独ではない。例えば、家事サービスは家庭内の誰かが担うことも出来るし、外部の業者に頼むことも出来る。つまりそこには競争があり、制約はあるが選択の自由もある。このような特徴から、非市場的な取引も市場取引と同様に解釈できると筆者は考えている。」

設問4：市場経済について理解した上で、自身の主張を明確かつ論理的に説明することができるかを問う問題。

解答例：「私は本意見に同意する。なぜならば、新しい知識や技術をいかに生み出し、社会に存在する資源をいかに有効にそして効率的に活用するかが、社会の発展において大変重要だと考えるからである。その場合、市場での取引活動が盛んになることで、より多くのそして高度な知識が生み出されることにつながると考える。また、資源のより有効なそして効率的な活用法も、市場の参加者が増えることで発見されやすくなるものとする。計画経済は、資源の利用を考えるのは政府の中枢にいる一部の人間だけになるが、そうした人たちは必ずしも万能ではなく、最適な活用法を考えられるとは限らない。市場経済でのより多くの人たちの智慧を活用することによって、資源のより望ましい利用法が見つけられるのではないだろうか。市場経済は小さな取引の集積であるが、そうした集積は市場参加者の判断の集積でもあり、それが民主主義の社会を構成するのは自然なことだと考える。」

なお、上記はいずれも解答例であり、その他のアプローチを排除するものではない。

経済学部

所得格差拡大は世界的に大きな注目を集めており、この問題にいかに向き合うべきか、議論が絶えないところである。どのような立場に立つにせよ、できる限りデータに基づいた議論を心がけること、国や社会によって格差の現れ方は多様でありうることを理解した上での議論を展開することが望ましい。また、社会科学の道を志す受験生には、感情論ではなく、自分の主張が社会にとって望ましいのだということを、それに反対する者や懐疑的な者に対しても説得力を持って議論する姿勢と能力が求められる。そのためには、それらの者が展開する主張についても、その背後にある論理を把握する姿勢と能力を持っていることが望ましい。

問(1)は、米国に見られる富裕層への所得集中だけが格差の唯一の現れ方ではない、という議論を、これまでに新聞報道や読書等を通して学んだ、あるいは直接・間接に見聞きした日本の例を用いて説得力を持って述べられるかが問われている。ありうる答えの例としては正規・非正規労働者間の格差やシングルマザー世帯の貧困問題などを挙げるができる。

問(2)の答えとしてありうるのは、近年の米国が IT などの技術革新やインターネットを活かした新しいサービスの導入を主導してきたこと、そのことがこれらのリスクの高い事業に挑戦して成功した者への所得の集中をもたらした可能性があることを指摘することであろう。日本では起業がより難しいとされ、新しい経済の流れに立ち遅れたことが、結果的に、米国に見られるような新たな富裕層を生み出さなかった可能性がある。そのような問題の解決策としては、例えば、起業に対する規制の緩和が挙げられる。

法学部

本出題は、法律学・国際関係論をはじめとする社会科学を高等教育機関で学ぶための基礎学力を問うことを目的とする。具体的には、現在の社会構造を前提にその構成員である個人が負うべき「責任」という概念について論考を発表し続けている社会学者・小坂井敏晶の代表作『責任という虚構』（東大出版会、2008年）を題材に、提示された文章を理解する能力、理解した内容を表現する能力、それを前提に自ら思考を展開する能力を試すものである。

設問1は、主として文章ないし文脈の理解を問う問題である。引用された文献において、政治哲学者ハンナ・アーレントが、「悪の陳腐さ」という比喩的な表現を用いて、何を伝えようとしたのか、その点に関する正確な理解が求められている。大量虐殺というショッキングな題材について、それを正確に遂行した現場の責任者が、必ずしも残酷・凶悪なパーソナリティの持ち主というわけではなく、むしろ平凡で勤勉な人物であった旨の指摘が何を意味しているのか、その点に関する理解と考察が望まれる。

設問2は、心理学上有名なスタンレー・ミルグラムの実験を題材に、なぜ、われわれの常識では説明できないような過酷な実験が善意の参加者によって続行されたのか、その理由を著者（小坂井敏晶）の見解から説明するとどうなるかを論述するとともに、著者を見解を前提に自分はどうか考えるかが、問われている。設問前段においては文章の理解力が、同後段においては思考を展開する能力が、それぞれ試されている。

社会学部

設問「人間はミスをおかす」という事実に、適切に対処する方法や態度について、具体例をあげながら論じなさい。

「ミスがあってはならない」という認識が、社会生活をおくるうえで優位になっている。実際、ミスがとりかえしのつかない重大な結果をもたらす場合も多々あり、ミスを減らすことによって人間は高度な技術文明を築きあげてきたといえる。

ミスを減らすために、ダブル・チェックや情報のバック・アップなどの個人的努力が促されるほか、ミスがおこりにくいシステムやインフラの設計が試みられている。また、ミスが避けられないことをあらかじめ想定したうえで、どこかでミスが生じても別のところでチェックが働く「フェイル・セーフ」のような仕組みも模索されてきた。

他方、自分ではなく他者がミスをした時に、それを受けいれ赦す精神や態度も人間社会において多様に表現され、寛容さを育む教育や、ミスによって生じた不利益への補償を社会全体としてひきうける仕組みなども、その具体的あらわれといえる。くわえて、ミスを笑いやユーモアとともに受けとめることで他者との人間関係が深まることや、ミスが新たな発見や発明のきっかけがとなることが稀ではないことも、見逃すことができない。

本設問では、「人間はミスをおかす」ということについて柔軟かつ多面的に思考を巡らせながら、適切に対処する方法や態度に関する自らの考えを整理し、論理的に提示する力を評定することを意図している。